

世界を直接体験することが正しい理解につながる

6月初め、玉川学園の高学年校舎では、放課後の教室に生徒たちの声が響いていた。

「ちゃんと仕事に就いていても失業する人が多いのはなぜだろう」「今の生活環境で不便に感じていることはあるのかな」

4つのグループに分かれて熱心に話し合っているのは、7月末から12日間、ボツワナと南アフリカ共和国を巡るスタディーツアーに参加する17人の生徒だ。ツアーの一環として、生徒たちがボツワナ大学の学生に対して、「貧困」「人権」「環境」「国際協力」に関する日本の現状や課題を発表し、両国の状況を比較しながら議論するプログラムが予定されている。この日は、その発表に向けた一回目の話し合いが行われた。

「私たちのグループは、環境問題について発表しようと思っています」と話すのは、高等部2年の文屋里菜さん。「環境分野は範囲が広いので、テーマを絞った方が良さ」という先生からのアドバイスを受けて、メンバーそれぞれが次回の話し合いまでに、大気汚染や水質汚濁などのテーマごとに、日本国内の現状を調べてくることになった。「ボツワナは急速に経済発展をしていると聞きました。日本と同じように、その成長の裏で環境問題が拡大していないのか」という点に関心があります」と文屋さんは話す。



ハボローネ近郊にある施設では、ボツワナの伝統的なセツワナ文化を体験した(2014年のスタディーツアー)



南アフリカ共和国ではタウンシップに物資を届け、現地の子どもたちと交流した(2014年のスタディーツアー)

世界とつながる教室

connect with
Botswana

ボツワナ



自分の目でアフリカを見る

2014年に文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール」に指定された、東京都町田市の玉川学園高等部・中学部。国連機関や国際NGOの職員として国際問題に積極的に貢献できるリーダーの育成を目指して、さまざまな取り組みを行っている。中でも、生徒たちに大きな影響を与えているのが、アフリカを巡るスタディーツアーだ。



ボツワナ大学など現地の学校で発表するテーマを決めるため、グループに分かれて話し合いを行った

スタディーツアーの事前学習の様子。JICA研修員のモロカさんがボツワナ式のあいさつを教えた



さまざまな出会いとともに価値観が変わる旅

今年で8回目となるツアーの最大の目的は、人に出会うこと。ボツワナの首都ハボローネでは、現地の高校の授業に参加したり寮に泊まったりして、同世代の学生たちと交流を深めるほか、青年海外協力隊の活動も見学する。また、ボツワナのエイズ孤児院や南アフリカ共和国のスラムを訪れ、貧困や感染症といった途上国が抱えている問題について学ぶ機会も用意されている。その一方で峽合先生は、「例えば、舗装されている道路や町中にあるスーパーを見

て、日本との共通点も多いことに気付く。そんな、同じなんだ」という感覚を若いうちから持つことが、何よりも大切だと思っています」と話す。

ツアーの事前学習の日、発表に向けた話し合いに加えて、ボツワナからJICA研修員として来日しているウェドウ・モロカさんによる出前講座も行われた。「ボツワナ料理の一つに、豆の葉を使ったモロホがあります。味はホウレンソウに似ています。モロカさんがボツワナの文化や産業、食などを紹介すると、生徒たちは興味津々な様子で耳を傾けていた。

また、現地の人と仲良くなるためにも大切なあいさつの仕方を全員で練習した。左手を右肘に添えて握手をしながら、相手が男性なら「ドウメララ」、女性なら「ドウメラマ」というボツワナ式あいさつを試すと、教室内は自然と笑顔で溢れた。最後にモロカさんは、「ぜひボツワナのことを好きになってください。そしてこれから先、留学や仕事でボツワナに行く人が増えたらうれしいです」と語り掛けた。

これまでの参加者の中には、帰国後、他の学生とも経験を共有するための勉強会を開いた生徒や、都内で「高校生アフリカ貧困会議(APYC)」を主催して、専門家による講演会などを企画した生徒もいるほど、スタディーツアーは生徒の意識や行動を変化させるきっかけとなっている。そんな先輩や友人の姿を見て感化されたと話すが、高等部3年の板崎七菜さんだ。「昨年参

加した友人から、人生観が変わった」という話を聞いて、今年のツアーには絶対に応募すると決めていました。ボツワナと聞くと貧しいイメージがありますが、本当にそうなのか。自分の目で見て、さまざまな話を聞いて、その国のことを理解したいと思っています。

遠い存在だったアフリカは、生徒たちの目にどう映るのか。新しい価値観に出会う、成長の夏が始まるようとしている。



玉川学園ではスタディーツアーの他にも、授業の一環として模擬国連を行っている。毎年、他の高校も含めた100人を超える生徒が参加して、議長や各国の外交代表となり国際問題について議論する